アリストテレースに於ける靈魂諸部分の聯關

——アリストテレースに於ける實踐の構造——

安藤孝行

一

曩に我々が靈魂の構造と題する前篇に於て到達した結論によれば、(一)靈魂區分の原理は必ずしも一義的ではなく、論理學的—心理學的、生物學的、形而上學的、物理學的、或は倫理學的と言ふ如き諸見地からして多樣な區分がなされ、而も我々はアリストテレースの區分をその何れかに限定して他を斥けたり、或は之を單なる思想の變遷として解し去るべきではない。もとより之等諸區分の多くは先人の思想體系中に淵源するであらうし、またその中にはアリストテレースの獨創に發するものもない譯ではない。併しアリストテレースは特に或る一つの區分のみを固執して他に對抗せんとするよりは、寧ろ之等を綜合して、夫々に獨特の意味を認めやうとしてゐるのである。先にも述べた如く、アリストテレースの著書の成立年代を文獻學的に研究することにより、茲にその思想の變遷を讀み取らうとする企ては、少くも現在迄のところ成功しない。加之我々は一般に文獻學的方法の濫用が思想體系を貧困化せしめる危險に留意せねばならない。外見的な矛盾や、異種的な言表を解釋する迄は、思想の變遷に限らず、我々としては確實な文獻學的根據に反せざる限り之等諸要素の間に論理的調和を齎すべく努めなければならない。蓋しすぐれた哲學者の思想は「拙劣な悲劇の如く」(二)脈絡なき混沌でもなければ、實在と論理との間に生れる多くの矛盾葛藤に對して盲目な程、抽象的で單純な圖式でもなく、却つて豐富な難問を提示し乍ら、より高く、より包括的な見地に立つ事によつて之等の難問をば、解決してゆく過程に他ならぬからである。而もこの事たるや他の如何なる哲學者にもまさつて、アリストテレースの精神的特徴である。アリストテレースの方法はハルトマンの言ふ如き問題論的方法には盡きないにして

も、アポリアの提示はその重要な契機であつて、決して單なる著作成立の新舊とか資料の混亂の責に歸せらるべきものではない。我々はアリストテレースが單にプラトーンやアカデメイアの群小思想家に伍するところの特異の學者たるに止まらず、實にギリシヤ哲學の大成者であることを忘れてはならない。プラトーンの反對者たることは、その繼承者たる事と共に彼の一面であり且一面たるに過ぎない。眞實はその何れか一方ではなくして、同時に雙方である。純粹に獨創的な思想家といふものを後期に假想して、プラトーン的又は一般に傳統的な要素をば擧げて以て初期に移すべきではなく、寧ろ後期のアリストテレースをば最も包括的綜合的な體系の完成者と目すべきであらう。

さて前述の如く靈魂は形而上學的見地からしても、倫理學的見地からしても、有理的と無理的の二部分に分たれる。形而上學的には、實體的な獨立性と永遠性の有無と云ふ點から兩部分を分つのであるが、倫理學的には各の靈魂部分の德が生成し或は獲得される樣式如何と言ふ、實踐的關心がこの區分を新しく意味づけるのである。靈魂は以上の他にも尙多樣な區分がなされるのであつて、就中生物學的心理學的な區分は特にアリストテレースの獨創的區分として重要な意味を持つのである。併し我々は之等異つた見地からする諸區分が最後期の作たるニコマコス倫理學に於て或る程度迄綜合統一されてゐるものと解する。(三) 先づ心理學的生物學的區分による營養的(トレプティコン)部分が無理的であり、理知的(ディアノエティコン)部分が有理的であることは明かである。その他の諸部分、卽ち感覺的(アイスセティコン)、表象的(ファンタスティコン)、欲求的(オレクティコン)、運動的(キネーティコン)の四種は或る意味では無理的であり乍ら、他の意味では又有理的でもある。この中間的な諸部分をば有理的又は無理的の二概念の下に包攝する爲に、アリストテレースは之等兩部分に就て夫々二種の意味を區別してゐる。卽ち勝れた意味での有理的部分と第二義的な有理的部分がある如く、無理的部分にも勝義のそれと第二義のものとが認められる。勝義の無理的部分とは全く理性と沒交渉な機能を營むもので、純粹に生理的無意識的な現象たる限りに於ける營養攝取、生育、或は生殖の如き諸機能を司る所謂植物的靈魂が之に屬する。(四) しかるに第二義的な無理的部分は恰も人が親の言葉に聽從する如くに理性の命令禁止に服從したり、或は之を聽き乍ら、その命令に反抗する如き靈魂部分である。(五) この樣な中間的部分の機能は茲では欲求によつて代表されてゐるが、(六) 詳しくは單に欲求にのみ限らず、之と最も密接な

關係をもつ感覺、表象、運動等を含むものと解される。確かに之等の諸機能は營養成育生殖等が營養部分の一種に包攝される程直接的な同一關係に結ばれては居らず、その間には或る程度の階層的相違があり、隨て常に必然的に隨伴するとは限らない。しかもそれらは極めて親密な聯繫を持つもので、特に實踐的見地に立つ倫理學にとつては殆ど同一部分の如く扱はれうるものである。勿論感覺や表象は實踐の原理には限らず、純粹に理論的な認識の契機ともなるものであるが、而も之等は必ずしも理性を持つた動物ならずとも、動物一般或は多くの動物の靈魂に屬する機能であつて、この様な動物は感覺や表象を動機として場所的運動をなし、この運動の直接的動力因が欲求に他ならない。隨てそれは必ずしも欲求を代表機能とするを要せず、時には又感覺を代表とするものであつて、前述の如くプレンターノは特に後者に着目して、アリストテレースの靈魂部分を營養的、感覺的、理性的の三部分に歸してゐるのである。要するに茲に言ふ第二義の無理的靈魂は感覺、表象、欲求及び運動の諸機能を含む意識的動物的な靈魂部分である。倫理學が特に欲求機能を強調する所以はその實踐的關心によるものであつて、その他の諸機能は何等かこの代表的機能の活動を準備又は指導するものとして考察されるのである。この様な靈魂部分は、それが理性に關與する限り、裏からみればまた有理的部分であるとも解されるので、アリストテレースは之を同時に第二義的な有理的部分と呼び、それに對して一層優れた意味で有理的な部分は、それ自らの中に理を有する思惟的部分であると述べてゐる。併しこの點に就ては先にも述べた如くより整合的に嚴密な分類をなすならば、寧ろ有理的部分そのものを分つて、一は理性が全く獨立無關心に自己の思惟活動を營む理論理性の領域、今一つは右に述べた如く恰も親が子を導く様に、第二義の無理的部分を指導する實踐理性となすべきである。第二義の有理的部分は第二義の無理的部分と關聯し、互に表裏をなすのであるが、嚴密に言へば直ちに同一ではない。蓋し命令することは服從することではなく、前者は本來的に有理的であり、後者は本來的に無理的である。前者が無理的であり、後者が有理的でありうるのは唯附帶的な意味に過ぎぬ。この區別は單に我々の解釋と言ふに止まらず、アリストテレース自身の爲してゐるところであつて我々は之を第二義の無理的部分と有理的部分の合一する區分より一層精密な思想であると解せざるを得ない。第一の分類に於ける有理的部分の二種は理

知的（エーペイコン）と性狀的（エーティコン）の對立であるが、第二の分類に於けるそれは理論的（セオレーティコン）と實踐的（プラクティコン）の對立である。若し有理的靈魂部分と言ふ概念と理性的部分と言ふ概念とを區別しうるとすれば、前者は有理的部分の二種であり、後者は理性的部分の二種であると言へやう。

この樣に靈魂の機能別による多くの部分が、無理的と有理的と言ふ古來の區分法による二部分と組合される事によつて、理論的分類に實踐的意味の附與される端緒が開かれた。蓋し所謂心理學的區分の動機は理論的であるのに對して、倫理學的區分の動機は實踐的であると言ひうるからである。（一六）尤もこの異質的區分の媒介は倫理學書の關する限り完全に果されてゐるとは言ひ難い。その意味で、倫理學に於ては二部分說が優勢で、心理學に於て成就された機能的分類が閑却されてゐるといふイェーガーの批評は或る程度迄眞實である。（一七）併しそれは彼の解する如く、倫理學的思索がプラトーンの先蹤に羈束されてゐて心理學的研究の成果が充分に活用されなかつたとか、藤井氏の如く、前者が後者より成立年代に於て先行するといふ樣な事情によるものではなく、むしろ主として兩著の學的關心或は見地の相違に由來するものである。蓋し心理學は自然學の一部であり、主として理論的考察であるのに對して倫理學は實踐學の一種として、實踐的關心に支配されるのであつて、德の分類や考察も單なる自然的機能の觀察記述ではなく、人間の私的公的生活の合目的的遂行の爲の方法を見出さんとするものである。倫理學に於て例へば營養の德とか視覺の德とか表象の德とかを語らないのは、斯る靈魂機能の單なる自然的卓越が實踐的に無意味であつたが爲に他ならない。倫理學に於て靈魂の構造が問題となるのは德を明かならしめんが爲であり、（一八）德が問題となるのは幸福の實質を規定し、ひいては個人並びに國家の最上の幸福をもたらさんが爲である。倫理學書をば心理學的諸機能に隨て記述せしめんとするのは方法論的無知によるものであり、アリストテレースをして言はしむれば正に教養（パイディア）の缺如を曝露するものに他ならない。（一九）

併し乍ら人間の行爲が問題である以上、人間靈魂の心理學的諸機能の相互關係を一層徹底的に究明することはもとより望ましきことであり、行爲や德性の本質理解に資するところ少なからざるものがあるであらう。唯このことたるやひとり心理學や倫理學のみに求むべきではなく、むしろアリストテレースの全著作體系に亙つて關聯に探究されねばならない。倫理學は實に斯くの如き體系

的聯關を豫想して居り、我々の理解も亦之に卽さねばならない。我々の意圖するものは正に斯くの如き體系的理解による實踐の構造解明に他ならない。

二

抑、靈魂は「生命を可能的に持つところの自然物の、(二〇)形相と言ふ意味での實體」と定義された如く、もともと肉體の活動態であり、物體をして生命ある肉體たらしめる原理に他ならない。肉體は靈魂によつて生きるのであつて、靈魂の去つた肉體はもはや肉體ではなくして單なる物體に過ぎない。(二一)隨て營養とか生殖と言ふ如き原始的生活機能にしても、それはもとより單なる物體たる限りの肉體の機能ではなく、生命の原理としての靈魂の機能に違ひない。(二二)併し靈魂と肉體の關係が右の如くである以上、如何なる靈魂の働きと雖も肉體を離れてはありうべき筈はなく、我々が肉體の働きと言ふのは肉體に於ける靈魂の活動であり、靈魂の活動と言ふのは、靈魂として現れる肉體の活動に他ならない。現象を具體的に觀察せんとする眞實の自然學者は心理現象をば單に意識現象としてみるのみならず、同時にその生理的基底を明かにすべき課題を負はされる。(二三)唯肉體の靈魂に對する制約關係は心理現象の低き段階に於ては直接的であり、高き段階に於ては間接的であると言ふ區別は立てられる。低き靈魂現象は他の異質的な靈魂現象の基底を持つことなく、直接肉體に接するのに對して、高等な靈魂機能は單に肉體的制約のみならず、又他の下等な靈魂機能を豫想し、之に基づけられるのである。斯くして最も下等な靈魂機能たる營養や生殖活動は恰も單なる肉體の機能にすぎぬかの觀を與へるし、高等な靈魂機能たる思惟は、例へば表象や感覺の基底づけを要することは比較的容易に觀取しうるとしても、ともすれば肉體の制約を脱するかの如く考へられがちである。併し斯くの如きことは唯比較的程度的な相違にすぎず、原理的には靈魂機能は凡て肉體的變化を伴ふことなしには生じえないのである。唯一の例外の如き能動理性に就ては、曩に明かにした如く、實は眞に肉體の形相たる限りに於ける靈魂部分ではなく、斯かる人間的受動理性に形相を與へる容觀的精神であつたのである。

肉體と靈魂とは、もとより異質的二元として關係交渉するのではなく、質料と形相として相伴ふものであるから、嚴密に相關的であり、肉體に於ける中樞的器官は同時にまた靈魂の場所であり、その統一の條件である。靈魂が生命の原理に他ならない以上、それが特に肉體の中

樞に座を占めるのは自明の理である。(二四)そしてこの樣な肉體と靈魂の中樞は心臟に求められる。(二五)その理由は、之が肉體の上下左右の中心に位すること、血管の起點であると(二六)共に終點であつて血液の收散所であること、(二七)また生命現象の必須條件たる體溫が茲に依存して、(二八)心臟の運動が止れば體溫は冷却し血行も停止して動物の死滅を招來する(二九)と言ふ如き解剖學的生理學的事實の觀察による。(三〇)斯くして心臟は個體發生の順序に於ても第一である如く有血動物の營養機能の中樞となるのであつて、(三一)茲に出入する血液は營養物を全身に補給する媒介的使命を負はれた。(三二)なるほど食物は先づ口を通して攝取され、胃によつて消化されると共に、身體の末端に於て排泄されるのであるが、全身の營養を主宰するのは心臟であつて、その他の部分は唯之の補助器管にすぎない。(三三)

元來生物個體の統一原因は肉體ではなくして、靈魂であるが、(三四)靈魂が肉體の形相であり現實態である以上、靈魂機能の聯關も亦肉體の組織に伴ふ譯であつて、靈魂の諸機能は何れも心臟を基體として、茲に會することによつて相互に關聯する。(三五)卽ち心臟はひとり營養機能の中樞たるのみならず、感覺、(三六)表象、(三七)感情、(三八)欲求、(三九)運動(四〇)の如き所謂第二義の無理的諸機能をはじめとして、思慮(四一)と云ふ如き理知に對してさへ或る意味でその場所を提供する樣に考へられるのである。

靈魂は前述の如く各種の見地からして多樣な部分に分たれるのであるが、之等の部分はもとより各種の認識の關心に隨つて人爲的になされた區別にすぎず、具體的な靈魂活動はそれらの諸部分或は諸機能の相互聯關であり、相互滲透でなければならない。この事は單にその活動に關するのみならず、また分化發展に關しても妥當するのであつて、靈魂諸機能の分化發展は肉體諸部分の分化發展と對應し、且兩者は結局生物の生活樣式の複雜性の程度に比例する。(四二)しかるに生物の生活樣式と肉體構造の分化發展は全く連續的であつて、生物分類に當つては之を何れの種類に屬せしめるかに迷ふことが稀でない。(四三)この樣な連續性が動植物のみならず、生物と無生物の間に迄及ぼされるとすれば、(四四)靈魂諸機能相互間に限らず、遂には靈魂と肉體の區別さへ相對的となるにちがひない。この點にこそ正に形相と質料といふアリストテレースの形而上學原理の特徴が現れるのであつて、それが例へばデカルトやスピノーザ等の近世哲學に於ける物と心の異質的二元論又は並行論と根本的に異る所以である、ライプニッツの單子論が近世に於けるアリストテレース說の復

活とみられる所以である。質料は形相の基體として常に之に伴ふのみならず、兩者はまた可能と現實として發展の關係をなす。肉體は靈魂の質料として常にその基體的制約たると共に、生命の發展は肉體的なものから靈魂的なものへの連續的發展として理解される。この發展系列を上下兩方向に延長すれば一方に於て靈魂が殆ど無となる物質界に至ると共に、他方に於て肉體の殆ど認めがたい精神界に至る。前者の極限が所謂第一質料であり、後者の極限が神である。(四五)しかるにこの系列が完全に連續的である限り、所謂無生物と雖も尙微弱にして不完な生命の可能性を含むと共に、有機的な精神と雖も尙一種の肉體性を有すると考へられる。かくして全存在界は生命の遍漫する連續的發展の體系として理解される。(四六)日常的な意味に於て命なき物質の運動と雖も生命現象と全く異質的なものではない。地水火風やエーテルの如き元素の運動がその本性に隨つて一定の法則をもつ如く、生物の運動も亦各自の本性に隨ふのであつて、相違するのは唯複雜性の度合にすぎない。(四七)しかも生物の運動或は生活の複雜性とは畢竟生物體を構成する器官の複雜性に由來するものである。(四八)隨つて有機體の活動としての靈魂現象は器官を構成する元素の本性の複合的活動形式であると言ふことが出來やう。他方生命がその日常的妥當領域を超えて神的存在に迄適用される時、そこには有機體との類比にしたがつて、斯る神的存在にも何等かの質料が肉體の如くに認められるのである。即ち生物體の質料が次第に形相化され、もはや唯僅かに場所的運動の原能性のみを含む如き存在、即ち天體こそ超有機的な靈魂の肉體であると考へられる。(四九)更に之を超える時、そこには最早如何なる質料も、如何なる可能性をものこすことなき純粹な形相、完全な現實態に於ける精神としての神に至る。(五〇)宇宙の一切の存在一切の現象は斯くの如き完全な發展の體系をなし、連續性がその根本原理となる。(五一)神の世界支配はその意欲に發する行爲や作爲ではない。(五二)行爲や作爲は欲求に基く行動であり運動であるが、(五三)意欲や運動は不完全者の特徴にすぎない。(五四)神は完全者として完き靜止であり、(五五)その活動は自己觀想に止まる。(五六)一切の生物無生物はこの至高者を愛し、之を憧れることによつて動かされるのであつて神自らが動くものとして他を動かすのではない。(五七)隨て森羅萬象がその本性にしたがつてなす一切の營みは神聖な營なみであつて若し神の計らひと言ふ如き擬人的表現が許されるとすれば、自然の力こそは正にそれである。(五八)實にライプニッツの單子論と豫定調和說は夙にアリ

ストテレースに於て斯の如く見事な原理を認めうるのである。(六一)

三

上述の如き壯大な宇宙觀の概觀を準備として、我々は當面の課題である靈魂機能の相互聯關に立還らう。言ふ迄もなく質料と形相、及び可能と現實の對概念はアリストテレース形而上學の根本的原理であつて普遍的妥當性を有するものである。斯くしてそれは肉體と靈魂の間に適用されると共に、靈魂相互の關係をも說明する。卽ち肉體は質料として、靈魂は形相として具體的な生物體を構成すると共に、前者は可能態として後者の現實態へと發展するが、同樣にまた靈魂の諸部分も低きものは質料として高きものは形相として前者の可能態が漸次後者の現實態へと發展すると言ふ關係を持つ。この靈魂機能の分化發展はとりも直さず生物進化の階梯に他ならない。斯くして、高等な靈魂機能は下等なものを豫想し、之なくしてはありえないが、下等な靈魂機能は必ずしも高等なものを要せず、それのみで存在しうる。(六二)(六三)この最低の機能が營養や成育や生殖であり、かゝる機能を營む部分が所謂靈魂の營養的部分とか營養的靈魂と呼ばれるものであつて、生命の最も必須的基礎的なものであり、之は他

をまたずしてありうるが、他は之なくしてはありえない。(六六)斯の如き最低の靈魂のみを有する生物が植物に他ならない。(六七)しかるに生物はその營養攝取の樣式によつて機能を異にし、その或る種の樣式は靈魂のより高等な機能を要求するに至る。(六八)卽ち先づ生物をその食物とするところの生物に於ては感覺が營養攝取を指導する嗅導的機能として發生し、之が動物一般の特徵となる。之に關するアリストテレースの言葉を引けば「(六九)自然は何一つ無駄には物を作らないから、動物は必ずや感覺を持たねばならない。何故ならば凡そ自然的存在は皆或る目的のためのものであり、若くは或る目的の爲にあるものにとつて生起することに他ならぬからである。されば若し前進運動をなしうる凡ての身體は高一感覺を持つて居なかつたならば破滅して了ひ、それが自然の作爲であるところの完成に到達し得ないであらう。卽ちそれは如何にして營養をとる事が出來やうか。運動することなくして定着してゐる生物は、確かにそこからそれらのものが發生して來たところの物を（その營養物として）持つてゐるのである。」この命題は誠にアリストテレースの生物學の目的論的性格を物語つて餘蘊がない。併し動物靈魂の根本機能たる感覺が、動物の營養攝取の樣式によつて目的論的に決定的

であると言ふ考は、必ずしも單なる有神論的目的論になるとは限らない。アリストテレースの目的論は人格神の目的意識を豫想する造化説ではなくして、生命に内在的な形相原理の發展説である。[七〇] 生命進化の事實は全く無關係な要素の機械的集合離散によるのでもなければ、人格神の主宰によるのでもなく、生命そのものに内在する創造的原理による自らなる生成とみられるのである。[七一] ベルグソンなどを代表者とする現代實用論者は兎角アリストテレースを理性論者の如く貶す樣であるが、實は右に觀察した如く感覺や知性の發生と本質を生命の必要に基かしめる點に於てアリストテレースは遠く實用論を先驅してゐると言ふも過言ではなからう。[七二] 但しアリストテレースは或る箇所では感覺を知識の如く純粹に判別的な認識能力として語つて居るし、またそれを行爲の原理となすことを拒んでゐる。之は確かに感覺を單なる理論的認識の要素と解する主知主義的認識論の主張とも受取れる。併し判別的であるといふことは純粹に抽象的に把握された感覺機能の規定であつて、具體的な感覺ではない。感覺は具體的には一方茲に述べる如く營養機能を基體として、その樣式に制約されると共に、他方また後述の如く感情を媒介として欲求や行爲を制約することが認められてゐる。この兩種の見解は一見矛盾を免れない樣であるが、實は見方の相違によつて生ずる外觀的矛盾にすぎない。感覺は發生的には實用的であり、その目標に於ては理論的である。感覺がその發生に於て、またその原始形態に於て、或はその日常的具體的活動に於て實用的であることは、それが理性を持たぬ動物一般に通ずる生命現象であると言ふ一事によつても充分に立證される。[七三] 動物の感覺的認識が純粹に理論的な認識ではなくして、その直接的生命の維持と發展、言ひ換へれば營養と生殖に奉仕することは言ふ迄もない。[七四] 既にして感覺の中樞機官そのものが營養の中樞と同じく心臟に求められてゐるのである。[七五] 而も感覺は單に感覺として抽象的に把握される限り單なる認識であつて欲求や行動ではない。この感覺の持つ形相受容の能力こそ、感覺をして理論的認識の根源的要素たらしめるものである。感覺の持つ如上の二重的性格は我々が次に觀察せんとする特殊感覺諸形式の發展過程によつても明かに裏書されやう。

感覺と營養との間に基底付けの關係が成立すると同樣更に感覺相互の間にも階層があり、觸覺[七六]と味覺は最も低く而も味覺は食物に觸接する感覺であるからと云ふ理由[七七]によつて一種の觸覺であるとも考へられる。味覺と觸覺

の次には嗅覺が、更にまた聽覺と視覺とが次第にその上に位するのである。靈魂機能の累層的發展の法則は感覺相互の間にも妥當して、下等の感覺はそれのみで獨立に存在しうるが、高等のものは下等のものを豫想する。(七八)下等の感覺としての觸覺（及び味覺）は直接對象に接觸することによつて感覺するが、嗅覺以上の高等の感覺は媒介物を通して感覺する。(七九)直接營養と關係するものは言ふ迄もなく、觸覺と味覺或は味覺を含めた意味での觸覺であり、之なくしては動物は生きることが出來ない。(八〇)生殖も亦營養と不可分の原始機能であるから、(八一)之亦最低感覺たる觸覺を媒介することは明かである。味覺と觸覺の「二つの感覺は、共に動物にとつて必要缺くべからざるものであり、觸覺なくして動物が生存しえない事は明かである。併し他の凡ての感覺は抑よく在らんが爲のものであつて、動物たる限り如何なる種類のものにもあるとは限らず、寧ろ或種のもの、卽ち前進運動をなしうる動物に必然的なものである。何故ならば若しその動物にして、將に生き永らへんとするならば、彼等は唯に直接物に接觸して知覺するのみならず、その對象から隔つてゐても尙それを知覺すべきだからである。」(八二)「例へば動物が視覺を持つてゐるのは、彼等が水中又は空中に生き、寧ろ一般に透明なものの中に棲んでゐることから、物を見んが爲であり……聽覺を持つてゐるのは彼が何かを合圖されんが爲である。」(八三)高等の感覺も本來は生活の必要に基く機能ではあるが、單なる生存の爲と言ふに止まらず、一層よき生活の爲の機能である。そして一層よき生活の爲には差當り直接觸れることの出來ない遠隔の對象についての知覺を必要とする。視覺や聽覺が味覺より高等である所以は、それが空間的な距離を持つた對象についての認識を與へ、生活にとつてより廣い見通しを與へるが爲に他ならない。且つこの空間的距離に於てある對象の知覺は、主體的には時間的距離に於てある對象の認識を與へることに他ならない。卽ち「嗅覺、聽覺、視覺の如き外部の物を媒介として起る感覺は、動物の中で歩行しうるものが、之を所有するのであつて、之等は一つには之等を所有してゐる凡ての者にとつて、存在を完うする爲にある。卽ち食物を豫め感覺してそれを求めたり、惡きもの有害なものを豫め感覺して之を避けんが爲である。」(八四)對象と主體との間の空間的距離は感覺と享受との間の時間的距離と正比例する。そして之等の距離の大さは感覺の價値階層の高下と對應する。高等な感覺とは時間的空間的に遠き對象に就ての廣き觀察と豫測を與へる

機能に他ならない。之はひとり感覺相互の間に成立する關係に止まらずこの方向を延長すればひいては感覺と知性との間の關係も之と類比的に規定されるであらう。(八五)

四

高等感覺は時間的空間的に遠き對象の知覺を與へることにより、營養生殖の如き根源的な生命機能を下等感覺にもまさつて合目的的に指導するのであるが、單にそれに止まらずして一層高等な精神活動を準備するものである。三種の高等感覺の中でも嗅覺は殆ど味覺に從屬して、營養生殖に間接的指導をなす役を負はされるが、特に人間に限つて、この樣な直接營養に關るものの他に一般に健康を增進したり、障害したりする嗅覺が認められる。例へば花の芳香に快感を覺える如きはそれである。(八六)聽覺や視覺も營養に無關係ではなく之を間接的に指導するものであり、發生的には生存や生殖の目的の爲に生じたものに違ひない。(八七)併し之等高等感覺の特徵は漸次直接的な生の關心を脫することである。就中聽覺と視覺こそ我々の高等な認識活動の必須條件である。もとよりそれ自らとしては一種の感覺たるにすぎないが、それにも拘らず單なる感覺を超えた知的認識の端緒をなす。卽ちこの樣な感覺は「一つには之等を所有してゐる凡ての者にとつて存在を完うする爲に在るが、二つには叡智をも備へてゐるものにとつて、その存在をより良くする爲に在る。蓋し之等のものは、ものの多くの特異性を告げ知らせるからである。この特異性からして、思惟の對象となるものの知慮(プロオーシス)と、實踐の對象となるものの知慮とが生れるのである。ところで之等の中、視覺はそれだけとつてみれば(生活の)必要に對しては一段と優れたものである。併し理智の(開發の)爲、又それに附隨する結果からみる時は、聽覺の方がより優れたものである。何とならば視覺と言ふ能力は凡ての物體が色を具有してゐることの爲に、多くの、そして凡ゆる種類の特異性を告げ知らせるのである。が聽覺は音の差異丈しか告げ知らせないのであつて、それが聲(卽ち有節音)の差異をも告げ知らせるのは、少數の動物に於てである。併し附隨的にではあるが、聽覺は知慮に對しては最も大なる役割を勤める。卽ち言論は聽かれるものであつて、それは知識の原因となるものだからである。」(八八)形而上學の冒頭も亦略之と同じ趣旨の感覺に於ける理論性の契機に就て物語つてゐる。「凡て人間は生れ乍らにして知ることを欲する。その證據は感覺に對する愛好である。蓋し感覺は實用を離れてもそれ自身の爲に愛好せられ、また特に眼による感覺が

愛好される。卽ち我々は何事かを爲さんとする爲ばかりではなく、何事をもなす積りのない時でも、いはゞ他の凡ゆることにまさつて見ることを願ふ。その理由は種々の感覺中この感覺が我々をして最もよく認識せしめ、また多くの特異性を明かにするからである。」聽覺と視覺の優劣は兎も角として、之等の高等感覺が直接的な生命維持の手段としての營養物の識別をこえて、より高き生活の爲の機能となることを述べるに當つて、屢〻繰返されてゐることは、それが多くのものの特異性を辨別せしめると云ふことである。感覺は凡て何等かの特異性の辨別であるが、之等高等感覺は單に直接的な生の關心を超えて理性の飛躍的な活動の媒介をなす。單なる自然的生命の維持の爲には必ずしも對象の甚だ多くの特異性を辨別するを要しない。それ故下等動物の感覺は比較的單純で生活の必須條件を充す限度に於て辨別的である。(八九)しかるによりよき生活の爲にはより多くの對象の享受を要し、隨てより詳細な特異性の辨別を必要とする。この生活環境の擴大に伴ひ、多くの對象の判別の爲に漸次高等感覺が發達し、更に之が基礎となつて知性が發達する。知性の發達の爲にはこの基礎的感覺を必要とするのであつて、感覺の中の或るものを缺けばそれに對應して知性にも何等かの缺陷を生ぜざるをえない。(九〇)感覺と理性は端的に對立する異種的機能ではなくして、生命進化の異つた段階に成立して類似の機能を營む生活の道具である。感覺の對象を個別的偶然的なものとすると共に知識の對象を普遍的必然的なものとして之に對せしめるのは(九一)アリストテレースが繼承せるプラトーンの根本思想であるが、(九二)それと同時に感覺は理性と類をひとしくする認識活動と考へられ、(九三)兩者の相異が發展段階の別として理解される。感覺が營養攝取の直接的必要に應じて發生すると共に、その樣式に應じて分化する如く、理性も亦一層複雜な生活の道具と言ふ意味を持ち、(九四)發生的にも活動條件としても感覺を基底として豫想する。(九五)理性の任務たる原因原理の認識と言ふものも時間的空間的に隔絶した存在に對する見通しをうる媒介された認識であつて、若し我々が直接そこに居合はせたならば感覺によつて知覺することをうる現象を隔つて居乍ら知ることに他ならない。(九六)感覺はその純粹な活動に於て知的認識を志向し、その限りに於て一種の理論的認識の如く認められるが、逆にまた理性はその發生の必須的條件として感覺を豫想し、之に連る。理性的認識を理念的に把捉する時にはそこに不死的な能動理性とか更には全く超越的な神的理性と言ふ如き概念

に迄登るが、之を現實的な生理心理的活動として把捉する時には、低く下等動物にも通ずる感性的要素を認めざるをえない。人間とはアリストテレースにとつても正に神と獸との中間者であるが、それは理性と而して感性とより合成された混合體と言ふよりは、むしろ感性の中より理性の發生をみたる高等な動物である。一體認識論に於て感覺を理知的認識の要素となすものは主知主義であるが、之を理知の原因となすものは實用論である。兩者は現代に於ては端的に對立する反對學說であるが、必ずしも本質的に相容れざる矛盾對立ではない。アリストテレースに於ては感覺は單に構造分析的に知的認識の要素たるに止まらず、實に理性の發生そのものを制約する。認識の理想方向としては主知主義的見解をとりつゝ、その發生と現實の說明としては寧ろ實用主義的解釋を示す。我々は茲にも彼の形而上學と實證科學との美しき調和を認める。感性は端的に惡と誤謬の源泉ではなくして寧ろ理性の母胎である。理性は單に超越的原理ではなく肉體の指導者であり、而もその指導は自己の最高至純の觀想を實現せんが爲の手段とせられる。過渡的存在、二重的存在たることは人間の有限性として單なる消極的價値に止まるものではなく、その人間は大地に足を踏みしめ、動物や植物とさへ生命の近親性を意識すると共に、而もその眼は遠く天空の彼方に放ち精靈と神々との精神的交歡を娛む。現實と理想、敬虔と矜恃の美しき調和、逞しき肉體を持つた理性人こそアリストテレースの人間像であつた。

併し感覺は上述の如く理性の起源であり、理性の究極的理想的活動は純粹理論的認識であるにしても、我々の精神生活は決して無媒介的に感覺から理性の觀想に迄飛躍するものではない。我々は個體發生的にも系統發生的にも先づ單純な感覺からはじめて次にその印象を保存する記憶を形成し、記憶を組織することによつて經驗を構成し、經驗の中に普遍的原理を發見することによつて技術を獲得する。この樣にして獲得した諸の技術をば更に組織し驅使するものが思慮とか政治と言ふ如き實踐知であり、この樣な實踐知の支配によつて合理的に組織され統制された個人的並に社會的生活の中にはじめて完全に自由な理論的認識の營みが可能となるのである。(九七) 尤もこの樣な過程は差當り發生段階を現すに止まつて、必ずしも本質的關聯を現すものではない。アリストテレースに於て理論的認識が本質的に實踐的認識や技術的認識を媒介とすると考へられたか否かは甚だ疑はしい問題であり、

我々は差當りこの解決を保留せねばならない。いづれにしても感覺に隣接する上層の機能は表象であり、表象は思惟に對しても欲求に對しても基體的役割をつとめることは明かであるから、我々にとつての次の課題は當然感覺と表象の關係でなければならない。

五

我々の上來の考察は專ら靈魂機能の累層的發展の發生的過程に向けられて居て、その本質の差別と聯關に觸れなかつた。それ故我々は今一度振り返つて營養と感覺の本質關係を顧みねばならない。この事は我々が感覺から表象に移行せんとする時直ちに遭遇する定義上の困難によつても必然的に要求される。卽ち表象は上述の如く或る意味で感覺よりも高等にして理性との中間に立つ機能であるが、その本質的な相違はと言へば、唯感覺像がその對象の質料と形相とを諸共に把捉するのに對して、表象像は質料を伴はぬと言ふに止まる。(九八) 然るにこの質料を伴はぬと言ふことは既に感覺が營養から區別されるところの微表であつて、同一の微表が再びより高等な兩機能の區別に援用されるのは不可能なことである。それ故我々は先にこの命題を文字通りに解することなく、感覺は當該形相を支へる質料に附帶する所の從屬的諸形相を共々に受容するのに對して、表象は唯特殊の形相のみを受容するものであるといふ解釋を提案したのである。(九九) 斯くの如き事情からしても我々は先づ感覺と營養の本質的區別を究めねばならない。

上述の如くアリストテレースによれば、外界の對象を完全に質料諸共受容する生物の活動は營養攝取である。(一〇〇) 之に反して感覺は質料を其儘として、唯形相のみを受容する。對象はそれによつて未だその獨立性を失ふことなく生物の中心へは唯物の姿のみが受容される。之が感覺像なのである。(一〇一) 我々が現代に於ける最も獨創的な思想家であるベルグソンに學ぶ所によれば、(一〇二) 形像の作用が自發的反應の主體に遭遇する時蒙る所の減少、或はその反射によつて生ずる虛像が對象の感覺像を形成すると云ふことである。而もこの新奇な表現はその本質に於て幾何もアリストテレースの感覺論を出でるものとは思はれない。アリストテレースの感覺が物體の質料を捨てて形相を受容するといふ時、質料の捨象とはまさにこの形像の作用の減少に他ならない。アリストテレースに於ても感覺は對象に何ものかを附與することではなくして、却て或るものを捨て去ることにすぎなかつた。しかもその捨て去ると言ふことは單に消極的な作用に止まるものではなく、

却て之によつて對象を支配せんが爲の準備といふ意味を持つ。

感覺が物體の質料を捨象して形相のみを受容するといふことは確かに感覺を以て原本的な抽象作用とみることに他ならない。併し感覺を抽象作用と解する事は感覺に對する抽象的解釋ではない。私は逆說を弄してゐる譯ではない。唯生哲學の亞流の抽象作用に對する淺薄皮相な攻擊を斥けるのみである。質料を捨象し形相を抽象するといふことはもとより精神が對象たる物に對して爲す一操作であり、それ以上の又それ以下の何ものでもない。それ以上でないと言ふ譯は、我々が（アリストテレースと共に）質料と形相とを先づ獨立に與へられた要素として、之から實在そのものを創造しようと意圖するのではないからである。それ以下でないと言ふ所以は與へられた實在に對する精神の認識活動は必ずや何らかの能動的操作を要する故である。凡そ抽象なきところ認識はない。文字通りの意味での具體的認識と言ふことは矛盾である。具體的なものは本質的に認識されない。それは唯存在するのみであり、高々體驗されるのみである。しかるに認識することは體驗することではない。否體驗と雖もそれが人間の體驗である限り何等かの認識と、隨つて又抽象を豫想することなくしては不可能である。それ故具體的認識が單なる矛盾を免れて意味をもつべきならば、それは抽象を媒介とする綜合の理想とのみ解されねばならない。詳しく言へば具體的な實在を完全に認識する爲に精細な分析を行ひ、之を再び遺洩なく綜合することによつて實在の眞相を概念的に表現せんとする努力の目標と解されねばならない。

アリストテレースは感覺を一種の受動であると解してゐる。（一〇三）しかもそれは單なる無爲に止まらぬ。其證據には感覺は個物に對し乍ら、個物そのものを受容するのではなく、その中に原初的な普遍を讀みとるのである。（一〇四）感覺が物體の質料を分離し之を捨象する作用であるとは、主體が物體を自由に處理せんとする準備に他ならない。質料は形相の基體として又は媒質として形相の變遷を超えて持續するものである。それ故それを創造することも破滅することも出來ない。その意味に於ては質料は我々の如何ともする能はざるものであり、（一〇五）意志に對する抵抗、否定の原理であるとも云はれやう。併し意志は單なる質料に對しては肯定的にも否定的にも對立するものではない。意志の對立するものは必ずや何等かの形相であり、或は形相に規定された質料に限る。質料とは無記的なも

のであり不定なるものであつて、(一〇六)その上に形相が印刻される材料に他ならぬ。精神は物體を質料に歸することによつてその上に自己の形相を印刻すべき可能性を獲得するのである。一方精神はまた物體の形相を自己の中に受容する。(一〇七)しかるに形相とは永遠的に決定せる存在であり、精神は唯この形相を或ものから奪つたり、或ものに與へたりする媒介をなしうるに止まる。(一〇八)前者は認識であり、後者は作爲である。物體からその形相を抽象するとは物體の中にこの決定的必然的な契機をとらへることと言ひかへれば物體が精神に及ぼす否定を甘受する事である。而もこの精神の自己否定は同時にその自己肯定の必然的契機である。即ち形相は物體をしてその物たらしめ獨立存在たらしめる原理であるが、而も物がその形を以て捉へられる時物は質料に化せられ、形相は精神に受容され精神の武器となる。(一〇九)精神は物の中に形をよみ取ることによつて、初めて物を支配する能力を獲得する。我々は物の認識を通してのみ物に對して作爲することが出來る。物の持てる形相を奪ひ之に對して精神が別途に獲得保有せる形相を置換することが出來る。之が後に述べる技術の本質である。(一一〇)感覺は最も下等の認識である。それは最も低い技術の要件である。高度の技術は知識を要する。併し感覺をさへ缺くところ靈魂の如何なる能動的作爲もありえないことは明かである。植物的營養能力が物體をその質料と形相諸共に受容すると言ふことは、營養能力の純粹受動性を意味し、感覺が形相のみを受容すると言ふのは、この質料形相の分離こそ感覺の能動性の本質たることを現す。感覺が表象や理性と共に判別の能力であり陳述的であると云ふのはもとよりそれが對象の形相を把捉し之を他の形相と區別するの謂であるが、この事の可能なる爲には先づ對象の中に形相と質料とを判別することを要するのであるから認識能力が判別的であるのはこの二重の意味であると言へるであらう。

尤も植物的營養的能力と雖も、一種の生命活動である以上單なる受動に止まるものではない。生物は食物となる物體を質料形相諸共に受容するが、それと同時に對象の持つてゐた形相は失はれて新しい形相が附與される。即ち食物は消化されて生物の身體を養ひ身體そのものになる。(一一二)併し營養のこの形相附與の作用は無意識的であることを特色とする。しかるに感覺の分離作用は意識的である。營養攝取に於ては先づ以て對象がその儘受容されしかる後分離されるが、感覺に於ては對象の獨立性をその儘にしておいて、先づその兩契機の分離を行ふのであ

る。前者に於ては變形が直接的現實的であるのに、後者に於ては間接的可能的である。言ひ換へれば、營養攝取に於ては、受容と反應が同一行動によつて遂行されるが、感覺に於ては行動が未來に向つて保留され、計畫されるのである。之はベルグソンが感覺像を可能的行動の圖式であると言ふ思想(一二)と根本的に一致する。唯ベルグソンのこの表現は正確を缺く嫌ひがあるのであつて一層分析的であり明晰を期するアリストテレースに於ては印象の受容とその綜合、之の保存と變樣及び實現への發動が目的論的に必然的な聯繫をなすことを認め乍ら、之等の諸契機に對して夫々感覺、共通感覺、記憶、表象、欲求と言ふ如く別個の概念を配當してゐるのである。兎も角感覺が右の如き本性を持つところに、それが又營養を指導する所以があるのである。實際動物の營養攝取は決して盲目的ではなくして、必ず何等かの感覺を媒介とする。動物は食物をとるに先立つて、先づ對象が何であり、如何にあるかを見極める。卽ちそれが果して食べられるものか否かを認識するのである。かくして營養と感覺の機能の相異も畢竟反應の直接態と間接態、現實と可能の相異であり、時間的空間的距離の相對的相異にすぎない。卽ち感覺と表象と理知の間に成立したと全く同一の原理に基く區別である。生命機能の質的區別は對象と主體の時間的空間的距離といふ量的差異に還元されるのである。(一三)

引用書略記號

Cat. (Categoriae) De Interp. (De Interpretatione) An. Pr. (Analytica Priora) An. Post. (Analytica Posteriora) Top. (Topica) Phys. (Physica) De Cael. (De Caelo) Gen. et Corr. (De Generatione et Corruptione) Meteor. (Meteorologica) De An. (De Anima) De Sensu. (De Sensu et Sensibili) De Memor. (De Memoria et Reminiscentia) De Somno. De Somnus. De Divin. (De Divinatione per Somnum) De Long. (De Longitudine et Brevitate Vitae) De Juvent. (De Juventute et Senectute) De vit. (De vita et Morte) De Resp. (De Respiratione) De Spirit. (De Spiritu) Hist. An. (Histria Animarium) Part. An. (De Partibus Animalium) Motu An. (De Motu Animalium) De Incessu. Gen. An. (De Generatio Animalium) Probl. (Problemata) Met. (Metaphysica) E. N. (Ethica Nichomachea) E. E. (Ethica Eudemia) M. M. (Mogna Moraria) Pol. (Politica) Oec. (Oeconomica) Rh. (Rhetorica)

章別、頁付等凡て Bekker の Akademie 版による

一 哲學研究第三二六號二八二—二九五頁

二 Met. N 3. 1090 b 19.

三 E. N. A. 13. 1102 a 26. 哲學研究前掲號二九〇頁以

下參照

四 E. N. A. 13. 1102 a 32. De An. B. 2. 413 b 8.

五 E. N. A. 13. 1102 b 13.

六 Ibid. b 30. Cf. Pol. Γ. 4. 1277 a6.

七 感覺は一種の認識である。(Gen. An. A. 23. 731 a 33) のみならずそれは判別的であることによつて理性と同じ領域に屬せしめられ (Motu An. 6. 700 b 20. An. Post. B 19. 99 b 35. De An. Γ. 9. 432 a 16. Top. B. 4. 111 a 19. cf. De An. Γ. 2. 426 b 10. Γ. 3. 427 a 16) 單なる感識であり思惟であると言はれる。(De an. Γ. 7. 431 a 8) 即ち感覺は判別的である限り、知識の原理として論證の端緒をなし (An. Post A. 18. 81 bs. Top. A. 12. 105 a 18) この點からして直接性の原理ではないと考へられるのである。(E. N. Z. 2. 1139 a 20. De An. Γ. 9. 432 b 19) 加之動物靈魂が一方場所的運動能力と他方感覺及び理知を含む認識能力に二分されることさくある。(De An. Γ. 9. 432 a 15. 3. 427 a 17) 併し之は惟ふに對象に對して能動的であるか、受動的であるかと言ふ見地からなされた區別であつて感覺の一面に過ぎない。それはいはゞ理想面であつて現實面ではない。感覺、殊に高等感覺は理論的認識の原理とはなるが、發生的にみれば凡て感覺はもともと肉體の維持發展の爲の機能として實踐的なものに相違ない。それが實踐の原理でないと言ふのは、欲求の如き能動的直接的原理でないと言ふにすぎない。そして欲求は必ず感覺乃至

表象を媒介する限り、感覺は行動の間接的原理たることは否定されない。

八 Part. An. Γ4. 666 a 34. Br. 647 a 21. 10. 656 a 3. Δ5. 681 a 19. Gen. An. A23. 731 a 33, b4. Br. 732 a 13. 5. 741 a 9. Γ7. 757 b 16 E. 1. 778 b 32. De An. B2. 413 b1. De Sensu. 1. 436 b 11. Z. 1. 467 b 24. Met. A1. 980

九 Motu. An 6. 701 a 5

一〇 De An. Γ10. 433 b 16. Motu. An. 6. 701 a 1. 10. 703 a 5.

一一 Brentano, Psychologie des Aristoteles.

一二 Ibid.

一三 E. N. A 13. 1103 a 1 ff.

一四 「靈魂の構造」五、哲學研究第三百六號二九〇頁。

一五 E. N. Z. 1. 1138 b 35 ff.

一六 cf. Zeller. Ph. d. Gr. II. 2. 499. NB. 5.

一七 Jaeger, Aristoteles 355 ff.

一八 E. N. A 13. 1102 a 18-25.

一九 Met. Γ4 1006 a 6 ff. E. N. A 1. 1094 b 19-1095 a 2.

二〇 De An. B. 1. 429 a 19.「靈魂の構造」一、哲學研究第三百〇號九六七頁。

二一 De An. A5. 411 b 10.「いづれにしても靈魂が肉體を離れる時は肉體は變散して腐敗する。從つて若し肉體を一にしてあるものがあるならば、それこそ正に靈魂であらう。」Part. An. A. 1. 641 a 17-21 Met. Z 10. 1035 b 23-

25.

二二 De An. A4. 416 a 19.「靈魂の同一の能力が栄養力と生殖力でもある」Ibid. 416 b 8 ff. そりゆえ生命に属らずしては如何なるものも観察しえないから、我はれるものとらるのは、靈魂を持つてゐる物體が靈魂を持つてゐる限りに於てあることころのものとらるることになる。」De An. Γ12. 434 a 22, 26. B. 4. 415 a 23. Gen. An. B7. 745. b 24. Γ7. 757 b 16. B3. 736 a 35. 4. 740 b 36. 740 b 29 De Juvent. 2. 468 b 2. De Resp. 8. 474 a 31. 18. 479 a 30. 尚之が植物にも通ずる限にしては寧ろ自動的な靈魂能力であることに就ては、De An. B. 2. 413 b 7. 4. 415 a 23. Γ9. 432 a 29. 12. 434 a 22. 26.

二三 De An. A1. 403 b 11 f.「むしろ自然学者とは一定の物體とその一定の性質の質料との働きと、それの凡る變様の凡てを取扱ふものなのである。」

二四 De Juvent. 1. 467 b 14-16.「そして靈魂の有體が肉體的なものでありえないこと、それにも拘らず少くとも肉體の或る部分の中にあり、しかも（肉體の）部分の中（実配的な）能力を持つてゐることころの或る部分の中にあることは明かである。」

二五 De Resp. 17. 479 a 1. De Juvent. 4. 469 a 28. De Somno. 2. 456 a 6. Part. An. Γ3. 665 a 12. 4. 666 b 14. Met. Z10. 1035 b 26.

二六 Part. An. Γ3. 665 a 11, 18. b 20. 666 a 15. De Resp. 17. 478 b 35. De Juvent. 4. 469 a 33. 1. 468 a 1. 2. 468 a 21.

二七 Part. An. B1. 647 b 4. 9. 654 b 11. Γ4. 665 b 15. 17. 666 a 8. 31. 5. 667 a 16. Gen. An. B4. 740 a 22, 28. 6. 744 a 5. 6. 753 a 1. Δ8. 776 b 12. E7. 787 b 28. De Somno. 3. 456 b 1. De Juvent. 3. 469 b 1. 468. b 32. De Memor. 8. 474 b 7. De Resp. 8. 474 b 7. Hist. An. Γ3. 513 a 22. 4. 514 b 22.

二八 De Juvent. 6. 470 a 19-22. 4. 469 b 8. 5. 470 a 6. Part. An. B3. 650 a 5.

二九 De Juvent 4. 469 b 9-20. De Resp. 17. 478 a 24. b 33. Pant. An. B7. 652 b 27. Γ7. 670 a 24. B. 7. 653 b 5. Δ13. 696 b 17. Gen. An. B6. 743 b 28.

三〇 De Juvent. 4. 469 b 13-20.

三一 De Juvent. 3. 468 b 28. 469 b 30. Gen. An. B. 4. 740 a 8, 13. b 3. 5. 741 b 16. 1. 735 a 24. 4. 738 b 16. 740 a 17. B6. 743 b 26. Γ2. 753 b 19. Motu An. Γ4. 666 a 10, 21. cf. Gen. An. Δ1. 766 b 2. Met. Δ1. 1013 a 5. Part. An. 4. 665 a 33, b 1. 666 a 20. B6. 742 b 36.

三二 De Juvent. 3. 469 a 5. Part. An. B1. 647 a 25.

三三 De Juvent. 3. 469 a 2. Part. An. B3. 650 b 12. 651 a 15. 10. Γ5. 668 a 20

三四 De Juvent. 3. 469 a 2-5. b 11.

三五 De An. A5 411 b 5. Part. an. A1. 641 a 17-21.

三六 De Juvent. 3. 469 a 5, 10. 1. 467 b 28. Part. An. B1. 647 a 25. 3. 469 a 10 Γ3. 665 a 12, 17. 4. 666 b 14. B10. 656 a 28. Δ5. 681 b 15, 32. Motu. An. 11. 703 b 24. Gen. An. B6. 743 b 25.

三七 Motu. An. 6. 700 b 19.

三八 Part. An. Γ4. 666 a 12.

三九 De An. A1. 403 a 31 Γ9. 433 a 1. cf. Motu. An. 7. 701 b 1-8. 702 a 20.

四〇 Part. An. B1. 647 a 25. Γ3. 665 a 12, 17. 4. 666 b 14. De Somno. 2. 456 b 4.

四一 Part. An. B26 48 a 3 ff. Gen. An. B6. 744 a 27. cf. Teichmuller, Neue Studien zur Geschichte der Begriffe III. 133-145.

四二 Part. An. B. 10. 656 a 1-8.「更に植物は靜止的な性質のものであるから、異質的な部分の多樣性をもたない。何故ならば少數の行動の爲には唯少數の器官の要しかないからである。‥‥併し單に生きるのみならず、また感覺もするところの生物にあつては、器官が複雜多樣であるが、その生活が卑なる生に止まらずして、より高等な生活となるに隨てこの器官の複雜性も增大する。その最も著しいものは言ふ迄もなく人間であり、ひとり人間のみが動物の中で神的なものに參與する存在である。」cf. Gen. An. A23. 731 a 24 ff. De Cael. B. 12. 292 b 7 ff.

四三 Hist An. 9. 1. 588 b 4 ff.「自然は無生物から生物に

向つて少しづゝ進續して之等の境界が認められず、また中間のものが何方の側に屬するかが判らない樣な仕方で變化する。即ち無生物の類の後には植物の類が續いてあり、植物の中でも或るものは他のものよりもすぐれて生命に關與することによつて相異するし、類全體が他の物體に對しては恐らく魂をもつて居るが、動物に對して言へば魂をもたない樣である。しかるに植物から動物への變化は前述の如く連續的である。それ故海中には動物であるか植物であるかにひとが疑惑する如きものがある。即ちそれは根をおろして居て、離せば多くのものは枯死するのである。‥‥また感覺に就ても動物の中の或るものは一つも現さないし、他のものは不明瞭に現す。‥‥また動物は常に僅少の相違を以て一は他に比して一層多く生命と運動をもつ如く相異する。また感覺が既に加へられたら、彼等の生活は性交に關して性慾によつて相違し、また分娩や子供の養育について相違する。或る動物は植物の如く唯にきまつた季節に自分の類を生み出し、他のものは子供達の食物について骨折りそれが消化と離れてもはや何等の交渉もなさない。しかるに他の動物はもつと長くて記憶を持つて居り、その子孫ともつと永い間そしてもつと社會的に生活する。」cf. Part. An. Δ5. 681 a 12. Δ10. 686 b 20 ff.

四四 Hist. An. 9. 1. 588 b 6.

四五 cf. Zeller, op. cit. 505 NB 1. ツェラーは彼で發展段階の頂點を人間としてゐるが、アリストテレースに於ては

人間は宇宙の最上の存在でもなければ、最高の生物でもない。天體や神も亦生物とみられてゐる。(Met. Λ7. 1072 b 29. Top. E 1. 128 b 19. E. 6. 136 b 7. De Cael. B2. 285 a 29. 3. 285 a 9. cf. B12. B2. 284 b 32. Part. An. A1. 641 b 15 ff) Zeller, op. cit. 467. 他方元素も亦生命を認められる。Gen. An. Γ11. 762 a 18 ff.「地や水の中に動物や植物が生ずるのは、地の中に水があり水の中に空氣があつて、凡て空氣の中には生命の熱があるからであり、隨て或る意味で凡てのものは靈魂に滿ちてゐる。それ故どこかに閉ぢこめられると急速に化合する。それらが閉ぢこめられ、濃厚液體が熱せられるとブツブツした泡沫の如きものが生ずる。生成するものが類に於てより貴いか貴くないかの相異は心的原理の包藏の中にある。」

四六 アリストテレースにあつては一切の存在は廣義に於ける生命を持つ。例へば空氣や風の生命が語られ(Gen. An. A10. 778 a 2) 海の生命が語られる。Metear B2. 355 b 4 ff. 356 a 33 ff.) その他一般の無機的自然現象も有機體との類比によつて語られる。(cf. Zeller, op. cit. 506 f.)

四七 アリストテレースは靈魂を地水火風の如き單純な要素の一つによつて說明しようとする自然學者達の諸說を批判して之を斥けてゐる (De An. A2) 併し靈魂は肉體の形相であり、肉體は上記の諸要素から構成された有機體であるから、靈魂の機能は結局は之等諸要素の複雜な機能に他ならない。

四八 註42參照

四九 De Cael. B12. 292 a 18 ff. B2. 285 a 25. 284 b 32. Part. An. A1. 641 b 15–E. N. Z 7. 1141 a 35. cf. Met. Λ8. 1073 a 26. 下等生物の器官や機能が單純であり、次第に高等なものになる程それが複雜になり、人間に至てその頂點に達する以上、人間よりも高等な生物と考へられる天體の生命機能は一層複雜なものとなるべき筈であるし、事實が之に反すれば天體に變異な生命を歸するのは誤りであることになる。併し天體を生物と考へるアリストテレースに於ては下等生物はその單純な機能により必須的にして價値低き生を營むのに對して、人間の如きは豐富な價値に與る爲に複雜な機能を要するが、之は他にまつところある爲であつて天體の如きは比較的まつ所なく自足的に高等な價値を享受しうる散單純な運動にて足り、神に至れば完全に靜止すると考へたものの如くである (De Cael. B. 12)。極めて巧妙な解釋ではあるが天體を神的生物と目する事に伴ふ困難を脫しえないことは言ふまでもない。

五〇 Met. Λ6. 1071 b 21. 8. 1072 a 26, 35. 1074 a 35. De Cael. Λ9. 279 a 16, a 32. cf. Met. Λ7. 1072 b 29. Top. E. 1. 128 b 19.

五一 註43參照

五二 Met. Λ7. 1072 b 7. 8. 1078 b 7 ff. Λ10. De Cael. Λ9. 279 a 16 Met. Λ7. 1072 b 7.

五三 E. N. K8. 1078 b 20. cf. 1078 a 9. b 5. 9. 1145 a

25. Zeller op. cit. 368 NB 1. Brentano. op. cit 238 ff.

五四　E. N. Z. 2. 1139 a 17 ff. 30 ff. 後段] ○參照

五五　E. E. H. 12. 1244 b8. 15. 1249 b 16. MH. B 15. 1212 b 35..

五六　Met. K7. 1064 a 37. A7. 1072 a 26. De Cael. A9. 279 a 32. B12. 292 a 18.b 5. Phys. Θ5. 250 b 20. De An. Γ10. 433 b 13.

五七　Met. A7. 1072 b 18. 9. 1074 b 21. E. E. H. 12. 1245 b 17. M. M. B 15. 1212 b 39-1213 a 7.

五八　Pol. Γ16. 1287 a 29. Top. E. 4. 132 b 11. Met. A7. 1072 b 3. Gen. et Corr. A6. 323 a 12.

五九　De Cael A4. 271 a 33. Geh et Corr. B10. 336 b 27 ff. Pol. H4. 1326 a 32. E. N. K 10. 1179 b 21. H. 14. 1153 b 32.

六〇　但し Part. An. B10. 656 a 7. Δ10. 686 a 27. E. N. K 7. 1177 a 13 ff. 等では唯理性のみが神的(テオエイデス)であるとされ、また De Divi 463 b 12. では之に對してその他の自然力は感覺的(ピュシケー)であると言はれてゐる。(cf. Zeller, op. Cit. 387 f.) 前者との比較によつても判る通りこの思想の相違も亦文藝學的に思想の發展としては解し難きものがある。恐らく後者に於ける區別はより發達を期するところから生れたものであり、感覺的なものも高い意味では神的と言ひうるのであらう。

六一　Leibnitz, Monadologie. また最近では例へば Erich

Becher の Pan Vitalismus も之に屬する思想である。(Einführung in die Philosophie, Metaphysik 232 ff.)

六二　De An. B2. 413 b 7. 414 a 33 4. 415 a 23. Γ. 9. 432 a 29. 12. 434 a 22, 26. De An. B. 3. 414 b 28「そしてヤ國形の場合と靈魂の場合では次の樣な近似點がある。即ち國形に於ても靈魂を持つてゐる者に於ても常に從に緩くものの中にはそれに先立つものが可能的に含まれてゐるのであつて、例へば四邊形の中に三角形が、感覺的部分の中には發達的部分が含まれてゐるのである。從つて我々の生物のそれぞれの靈魂、例へば植物の靈魂、動物の靈魂、又人間の靈魂とは何であるかを個別的に研究せねばならぬ。そしてどういふ點で後に緩くものとこの樣な關係にあるかを研究せねばならぬ。蓋し感覺的なものは發達的なものなしにはありえぬが、植物に於ては發達的なものが感覺的なものから離れてもある。更に又感覺なしにはその他の感覺はどれもありえないが、觸覺は他の感覺から離れてもありうる。實に動物の中には視覺も聽覺も嗅覺ももつてゐない動物が多いからである。更に感覺的なものを持つてゐる動物の中にも、或るものは移動力を持つてゐるが、或るものは持たない。最後に極少數のものは動考的なものや理知的なものを持つものがある。即ち之等死すべきものの中動考しうる力を持つてゐるものは他の凡ての力を持つてゐるが、その逆に他の力をもつてゐる者必ずしも動考的な力を持たず、實際或る者は唯栄養力だけによつて生き、他のものにはその栄養

力さへ持つてゐないものがあるからである。」

六三　營養と成育が同一部分に歸することに就ては De An. B2. 413 a. 25. 4. 416 b 12 f. I 12. 431 a 24. E. N. A6. 1098 a 1. 營養と生殖のそれに就ては De An. B4. 416 a 19. Gen. An. B4. 740 b 36.

六四　De An. B2. 413 a 31. b 5, 7, 12. 3. 414 a 31, b 31. I 9. 432 a 29. De Somno. 1. 454 a 13. De Juvent. 2. 468 a 28. E. N. A 13. 1102 b 11. Z 13. 1144 a 10.

六五　De An. B4. 415 a 23. I 12. 434 a 22. De Juvent. 2. 468 b 2. De Resp. 8. 474 a 31. 18. 479 a 30. Gen. An. B3. 736 a 35. 4. 740 b 36.

六六　De An. B2. 413 a 31, b 5. 3. 414 b 31. De Somno. 1. 454 a 13. De Resp. 8. 474 b 11.

六七　De An. B2. 413 b 7. 4. 415 a 23. I 9. 432 a 29. 12. 434 a 22, 26.

六八　De Juvent. 1. 468 a 9-12「何となれば植物に於ける根と生物に於ける口と云はれるものとは類比的なものだからである。之によつて前者は地から食物をとり、後者は互に他のものを通して食物をとる。」卽ち植物は大地から營養をとるのに動物は生物を食べることによつて營養を營むのである。Hist. An. 6. 1. 588 a 16 ff.「動物のその他の性質や生殖に就てもこの樣な仕方が妥當する。そして行動や生活は習慣や食物によつて相違する。何故ならば多くの他の動物にも人間に於てはもつと明白な物性を持つてゐるところの靈魂に關するあり方の痕跡がある。卽ち柔和さ（ヘーメロテース）と烈しさ（アグリオテース）、穩さ（カレモテース）と不穩嬢、勇敢と怯病、恐怖（デイオー）と大膽（タレー）、意氣と疲弱、それから理知に關して聰明（シュネセオース）的なものなど多くのものの中に之等の類同的なものが存ずるのであつて、それは丁度身體の諸部分に就て我々の語つた如くである。卽ち之等のものの或るものは人間に對し人間は動物の多くのものに對して程度的に相違するし、（卽ち之等のものの或るものは人間に於てはより多く有し、或るものは他の動物に於てより多く存する）或るものは類比的に相違する。卽ち人間に於て技術や叡知や聰明（シュネシス）がある如く動物の或るものには何か他のこの樣な自然的能力が存するのである。そしてこの樣なことは少年時代をみると一層明白である。卽ち彼等に於ては後に習性となるであらうものの痕跡や種子の如きものがみられるからである。後略」

六九　De An. I. 12. 434 a 30. また De Sensu. 1. 436 b 12.「さて然し個別に就て見るに、觸覺と味覺は凡ゆる動物に必然的に隨伴する。觸覺は心理學の中で述べた如き理由により、また味覺は營養の爲にである。卽ちそれは營養物に就て快きものと不快はものとを識別し、それによつて一を避け一を追及するのであり、且一般に風味は營養になるものの一情態である。そして嗅覺聽覺視覺の如き外部のものを通して起る感覺は動物の中歩行しうるものが之を所有するのであつて、之等は一つには之を所有してゐる凡て

のものにとつて存在を完うする爲にある。卽ち食物を豫め感覺してそれを求め、又惡きものや有害なものを豫め感覺して、それをさけんが爲である。」

七〇 Zeller, op. cit. 381.

七一 Part. An. A. 1. 641 b 12-26.「自然は凡てのものを或る目的の爲につくる。卽ち丁度製作物に於ては技術の然る如く、之等の事物にあつても他の何かがこの樣な原理或は原因であつて、之をば熱や冷さを凡ゆるものからとる如くに持つてゐる樣にみえる。また運動が若し妨げるものがなければそれに終局する如き目的がある時にはいつでも之は之の爲にあると言ふ。かくして明かにこの樣なものがあるのであつて、我々はそれを自然と呼ぶのである。」Phys. B. 8. 199 b 26 ff.「實際動かす者が思量するのをみない時或る目的の爲に起ると考へないのは不條理なことである。けだし技術と雖も思量しないことがあるのであつて、若し造船術が材木の中にあるならば、同じ樣に自然的に作るであらう。かくて若し技術の中に目的があるならば、自然の中にもあるのである。それは何人かが自分自身を治療するといふ場合最も明かである。卽ち自然はこの樣なものである。實に自然は原因であり、且或る目的の爲にと云ふ如くにして原因であることは明かである。」Met. K. 8. 1065 a 26.「ところで目的は自然によつて生ずるもの又は理知によつて生ずるものの中に存する。」

七二 cf. Bergson, L' évolution Créatrice 115 ff.

七三 E. N. H. 6. 1149 a 10. Part. An. A 5. 651 b 5. T. 4. 666 a 34. B1. 647 a 21. 10. 656 a 3. 15. 681 a 19 Gen. An A 23. 731 a 33. b 4. B1 733 a B5 741 a 9. 17. 757 b 16. E1. 778 b 32 De An. B2 413 b 1. De Sensu. 436 b 11. De Juvent. 1. 467 b 24. Met. A1. 980 a 28. E. N. I. 9. 1170 a 16. Z2. 1139 a 20.

七四 Hist. An. 6 1. 589 a 2 ff.「扨彼等の生命の一つの部分は生殖に關する行動であり、他の一部は營養に關する行動である。何故ならばこの二つのものに凡ゆるよきものの追及と生活とが關つてゐるからである。」

七五 De Juvent. 3. 469 a 5 f.「靈魂の感覺的能力の根源も營養能力の根源も心臟の中にあらねばならぬ。といふのは他の部分の營養に關する仕事は心臟の仕事の爲に存するからである。」Part. An. 4. 678 b 1 ff.「唯彼は心臟に類するもののみを持たねばならぬ、何故ならば凡ゆる動物には靈魂の感覺的部分と生命の原因は自體の部分の中でも根源的なものの中にあらねばならぬ。」

七六 De An. B. 2. 413 b 4.「ところで感覺の根本は觸覺であつて、それは凡ての動物に洽く屬するものである。恰も營養力が觸覺や凡ての感覺から離されても在りうる如くに觸覺も他の凡ての感覺から分離しうるのである。」2. 414 a 3.「卽ち動物の中或るものは凡ての感覺を、或るものはその中の若干を、他のものは唯一つの最も必要なもの、卽ち觸覺だけをもつてゐる。3. 414 b 3.「しかるに動物は凡て

少くも一つの感覺卽ち觸覺は持つてゐる。」Hist. An. A. 3. 489 a 17.「凡ゆる動物には一つの感覺卽ち觸覺のみが共通に屬する。」Part. An. B. 8. 653 b 23.「卽ち我々は動物を感覺をもつと言ふことによつて、また最初の動物は最初の感覺をもつと云ふことによつて定義した。それは卽ち觸覺である。」De Sensu 1. 436 b 13. De Somno 2. 455 a 7.「だが凡てのものは、動物の中の或る不具なものを除いては觸覺と味覺とを持つてゐるのであるから」

七七 De An. B9. 421 a 18. Γ. 12. 434 b 18. De Sensu 4. 441 a 3. Part. An. B. 17. 660 a 21.

七八 De An. Γ. 12. 435 a 11.「何故なら觸覺なしには他のいかなる感覺をも持つことが出來ぬからであつて、その譯は靈魂をその中に持つてゐるものとしての凡ての物體は前述の如く觸れることの出來るものでなければならぬからである。」

七九 Ibid. 14 ff.「土以外のものは感官を形づくりうるにしても、之等は凡て他のものを通して感覺し、媒質によつて感覺をつくる。しかるに觸覺は之等に觸れる事によつてである。それ故にまた觸覺といふ名を持つてゐるのである。僅に他の凡ての感官も觸れることによつて感覺するが、その接觸は他のものを通してである。唯觸覺のみ直接自分丈で感覺すると普通思はれてゐる。」

八〇 De An. Γ. 12. 434 b 10.「…しかるに觸覺は必ず持つて居らねばならない。その譯は次の事から明かになる。卽ち動物は靈魂を持つた物體であるが、凡ゆる物體は觸れられるものであり、しかも觸れられる物は觸覺によつて感覺される物であるから、若し動物が生を保つべきであるならば、その動物の體も觸覺しうる能力を持つて居らねばならぬことになる。なぜならば他の感覺例へば嗅覺、視覺、聽覺は他の物を通して感覺するが、觸れる物は、若し（動物がそれについての）感覺を持たなかつたら或るものを避け、他のものを把へることは出來ないことになる。ところで若しさうなら、動物は生を保つことが出來なくなる。この事が又味覺も一種の觸覺のやうなものである譯であつて、それは味と言ふものが食物の味であり、そして食物は觸れられる物體だからである。…されば之等（二つの）感覺は動物にとつて必要缺くべからざるものであつて、觸覺なくしては動物は生存することが出來ぬことは明かである。De An. B. 3. 414 b 6.「更にまた（凡ゆる動物は）食物についての感覺を持つてゐる。と言ふのは觸覺は食物についての感覺だからである。卽ち凡ての生物は乾いた物、濕つた物、溫い物、冷い物によつて養はれるが、之等のものを感じる感覺は觸覺だからである。

八一 De An. B. 4. 415 a 23. 416 b 24.

八二 De An. Γ. 12. 434 b 22.

八三 Ibid. 435 b 19.

八四 De Sensu 1. 436 b 18.

八五 cf. De An Γ. 10. 433 b 5 ff.

八六　De An. B. 3. 414 b 17「音や色や香等は營養にとつて何も役立つものではない」De Sensu 5. 443 b 16.「ところで嗅がれうる物の種類は二つある。……まことにその或るものは先に述べた如く味にしたがつて排列される。そしてそれは快と苦とを附帶的な仕方で持つてゐる。これらの味は營養物の一情態であると言ふ事の故に之等の味を持つてゐるものの臭ひは（その食物が）欲望される場合には快であるが、既に滿腹して了つてゐるものや少しもそれを要求しない者にとつては快ではない。又その臭を持つてゐる食物が動物にとつて快でない限り、その臭も彼等にとつて快ではないからである、……ところが臭のいま一つのものは、例へは花の臭の如くそれ自身で快である。何となればそれはより多くもより少くも食物に呼び寄せることをしないし、又食欲に何ら寄與しないで寧ろその反對だからである。」444 a 14.「即ちかゝる種類の臭は人間にとつて健康を助ける爲にあるのである。と言ふのはかゝる臭は他の如何なる働もしないからである。」445 a 1「だが彼等（他の動物）は悪い臭そのものに就ては、假令植物の多くが悪臭を持つてゐて、もしそれが彼等にとつて味か食物かに對して何らか寄與するのでなければ少しも顧慮しない。」「嗅がれうる物は嗅がれうる物としては營養に寄與しないことは明かである。併し乍ら健康に寄與することは經驗からも、上述のことからも明かである。從つて味が營養及び營養によつて養はれる身體に對して持つ關係を嗅がれうる物は健康に對して持つてゐる。」cf. E. N. I. 10. 1118 a 16.

八七　E. N. I. 10. 1118 a 16.「他の動物にあつても、之等の感覺に即して快樂が生ずるといふことは附帶的な仕方以外にはない。即ち犬は兎の匂を悅ぶのではなくそれを喰ふことを悅ぶのであり　唯兎の匂は兎をかぎつけるのに役立つたといふに過ぎない。また獅子は牛の鳴聲を悅ぶのではなく牛を喰ふことを悅ぶのであるが牛の所在の近いことを知つたのはその聲によるのであり、それ故牛の聲を悅んでゐる樣にみえるのである。「鹿或は野山羊を見つけて」悅ぶ人も之と同類である。彼は御馳走にありつけるだらうことを悅んでゐるのである。

八八　De Sensu 1. 437 a 1. ff. αἰσθησις を知覺と譯したのは、茲では實踐知と理論知の區別以前の廣義の認識能力として用ひられて居るからであり、所謂思慮の如き實踐知と區別する必要に基く。

八九　註 424 9 參照

九〇　Aon. Post. A. 18. 81 a 38 ff.「明かに又、若し或る感覺が失はれてゐたら、必ずや或る知識も失はれてゐるであらう。我々は歸納か論證によつて學ぶのだから、それを獲得することは出來ない。しかるに論證は普遍からであり、歸納は部分的なものからである。併し歸納によることなしには普遍的なものを觀想することは出來ない。併し感覺を持たないで歸納をすることは出來ない。蓋し感覺は個別に關る。即ち知識は之をとらへえない。何とならば、歸納な

き普遍からしても、感覺なき歸納からしてもそれを把えないからである。」

九一　De An. B. 5. 417 b 22. An. Post. A. 18. 81 b 6. 24. 86 a 29. Phys. A. 5. 189 a 7. E. N. B. 9. 1109 b 23. E. 5. 1147 a 26. Z. 9. 1142a 27. cf. De Juvent. 2. 468 a 22. Met. A. 5. 986 a 32. Λ 11. 1018 b 32. Gen. An. A. 2. 716 a 19. De Gen. et Corr A. 3. 318 b 29. E. N. K. 1. 1172 a 36. De Spir. 4. 482 b 19. 21 gc.

九二　Theaet. 160. 151 ff. 163 ff. 165. 179. 187. 192 ff.

九三　Motn An. 6. 700 b 26. An Post. 19. 99 b 35. De An. Γ. 9. 432 a 16. Gen. An. A. 23. 731 a 33 ff.「蓋し感覺は一種の認識である。そして知慮（プロネーシス）に對するのと魂なき類に對するのでは之の貴きとつまらなさとは大變な相異であると思はれる。即ち知慮に對しては單に觸覺や味覺のみを共有することは皆無にひとしいが、無感覺なものに對するならずつとすぐれてゐる。」

九四　Probl. Λ (XXXX) 5. 955 b 23.「神は我々の中に二つの道具を與へた。それらによつて我々は外の道具を使用する。身體には手を、靈魂には理性を、何故ならば理性はいはば我々の中に自然的な道具の如くに所屬する、そして他の知識や技術は我々によつて作られるものであるのに、理性は自然的なものに屬する。」假令この書の著者がアリストテレースその人でないにしても、この解釋はアリストテレースの眞意を捉へてゐると言はねばならない。cf. Part. An. Λ. 10. 687 a 7-23. Hicks' Note ad. 432 a 2. Rhet. A. 6. 136 a 23.「また善とはそれをば凡て感覺又は理性を持つたもの或は理性を持つに至るならばそれによつて希求される所のものである。」

九五　De An. Γ 3. 432 a 3「だが普通考へられてゐる如く感覺されるところの延長體の他に獨立しては如何なる事物も存在しないから、思惟される對象は所謂抽象的なものも、亦感覺物の特性や情態も感覺されるものとしての形相の中にある。そしてその故に何ものも感覺することなしには誰も何ものをも學ぶことも理解することも出來ない譯である。」Ibid 427 b 13.「だがこの表象する事も知覺する事なしには起らないし、又其物を表象することなしには判斷することもありえないのである。De An. Γ. 12. 434 b 2 ff.「だが定着してゐないで、生殖によつて發生した生物が、感覺を持つて居ないのに、靈魂や判別する理性を持つてゐるといふ樣なことはありえない。……即ち何故にそれは感覺を持たないで理性を持つことになるのか。と言ふのはその方が靈魂にとつてか又は身體にとつてかより良いからなのであらう。ところが實際はその何れにとつてもさうではない。何故ならば（感覺のない方が）一層よく思惟する筈でもなければ、またそれによつてよりよく生存するのでもないからである。だからして定着してゐない身體は如何なるものも感覺を持つことなしには靈魂を持たぬのである。

九六　An. Post. B. 2. 90 a 24-30.「中間者（媒辭）が我々

の探究するものであることは、中間者が知覺されるものである場合からして明かである。即ち我々は例へば蝕の中間者があつたかなかつたかと言ふ樣に問ふのは我々が知覺しなかつたからである。若し我々が月の上に居たならばこの事が起つたかどうかと言ふことも、何によつて起つたかと言ふことも問はないでも同時に明かであらう。何故ならば知覺することからして普遍的なものが我々に知られるであらうから。即ち今（地球が月と日を）さえぎると言ふ感覺があるし、今蝕が起るといふことが明かである。そこからして普遍的なものが起るのであらう。

九七　Met. A. 1. 980a 28 ff.「さて動物は自然に感覺を持つて生れてゐる。しかも之等の中の或る者は感覺から記憶が生れないのに、他のものにはそれが生れる、この故にこの樣なものは記憶することの出來ぬ者よりも賢く、且一層學びやすい。…人間以外の動物は表象と記憶とによつて生き經驗に與ることが少ない。しかるに人類はまた技術や勘考によつて生活する。しかも人間に於ては記憶から經驗が作られる。その故は同一事物に就ての多くの記憶は一個の經驗の能力を成就するからである。そして經驗も亦學問や技術に略類似してゐる樣に思はれる。學問や技術は經驗によつて人間に生じ來るのである。…技術は經驗から得た多くの觀念から同樣なものに就て一つの普遍的な判斷が出來上る時生れるのである。蓋しカルリアスが是々の病氣を患つてゐた時是々のものが利いたし、またソークラテースや多くの個人達の場合にもさうであつたと判斷をすることは經驗上の事である。しかるに一つの種によつて區別される樣な凡ての人々が一定の病氣を患つてゐる場合、例へば粘液質の人と又は膽汁質の人とに於てその人とが熱を病んでゐる場合に效能ありと判斷するのは技術上の事である。」Ibid. 981 b 13 ff.「それ故一般の感覺を超えて何等かの技術を發見した人は當然人々から讃嘆された。…併し乍ら多くの技術が發見され、しかもその或るものが必要のためのものであり、他は慰樂の爲のものであるとすれば、常に後者の發見者が前者のそれよりも一層聰明である樣に考へられる。それは彼等の知識が利用を目指してゐないからである。それ故必要のための技術が一通既に完成されて了ひ、又人々が最初に閑暇を持つに至つた土地に於て始めて快樂や必要を目當とせぬ學問が發見された。之がエヂプトに於て最も早く數學的技術の起つた所以である。蓋しそこでは僧侶階級の者に閑暇が許されてゐたからである。」An. Post. B 19. 100a 3 ff.（註118參照）cf. E. N. A. 1. 1091a 18-b 11.

九八　De An. Γ. 8. 432a 9.

九九　靈魂の構造三、哲學研究第三二四號一八一頁參照。但し多くの學者は「感覺像と表象像は類似で後者が質料を缺くと言ふ點で相違するのみである。」と言ふ命題に別段困難を認めてゐない。彼等は大部分感覺の對象が質料を持つと言ふ意味に說明してゐる。併しアリストテレースの語つ

てゐるのは感覺の對象 αἴσθησις と表象の內容との區別ではなくして、感覺の內容 αἰσθητικὰ と表象の內容 φαντασματικὰ との相違であるから、感覺對象が質料を持つてゐると言ふことは何等說明にならない。αἰσθητικὰ を αἴσθησις と訂正すれば」應その說明が通用する如くであるが、それでは αἰσθητικὰ と φαντασματικὰ の區別が無くなる。しかるにアリストテレースは玆（De An. Γ. 8. 432 a 9）では理知が觀想する時に表象を伴つてすると言つて、このことを以て知的認識が感覺を離れてありえぬことの證明を企てゐるのである。卽ち、その爲には「理知は感覺像を離れては思惟しない」と言ひたいところであるが、それは事實に反するので「表象像を伴つて」と言ひ、しかも表象像が感覺像と本質的な點で共通である所以を語らうとしたのである。それ故玆ではやはり感覺像と表象像の區別がなされてゐるとみる方が自然であらう。尤も之に對する我々の解釋も稍〻過ぎた嫌ひがないではないが暫く假說として提案して置く。cf. De Memor. r. 450 a 31.「例へば知覺されたものの或る種の印象を刻み込むからである」（卽ち知覺像の一部分の保存である）

一〇〇 De An. B. 1. 2' 424 a 32 靈魂の構造三、註二二、哲學研究第三二四號一七八頁。

一〇一 De An. Γ. 8. 431 b 26. Γ. 2. 425 b 23. B. 12' 424 a 17. 同上註二一。

一〇二 Bergson, Matière et memoire. 25.

一〇三 De An. B. 11. 423 b 31.

一〇四 An. Post. B. 19. 100 a 17.「卽ち（論理的に）無差別なものの一つが定立されれば、最初の普遍的なものが心の中に定立される。けだし感覺されるのは個別的なものであるが、感覺は普遍的なものに關る。例へば人間に關るのであつて、カリアスといふ人間に關るのではない。」然しそれは確かに未だ普遍的な概念についての認識ではない。卽ち Iqid. A. 31. 87 b 27.「が感覺によつては知識しない。蓋し假令感覺は斯々であることに關るのであつて、この物に關るのではないにしても、然も感覺されるものはこの物であり此處只今のことである、そして普遍的な物や凡てのものに就ては感覺することは出來ない。」

一〇五 cf. Baeumker, Problem der Materie 280 f. Dilthey, Beiträge z. Lösung d. Frage v. Ursprung unseres Glaubens a. d. Realität d. Aussenwelt. Gesamm. Schriften. V. 104 ff. 田邊博士「哲學と科學との間」一九八頁參照

一〇六 Phys Δ2. 209 b 9. Met. Γ4. 1007 b 28. Z11. 1037 a 27. 6'. 1049 b 1. M10. 1087 a 16. cf. Met. Z3. 1029 a 20. De An. B1. 412 a 7. Met. H1. 1042 a 27.

一〇七 Met.Z. 8. 1033 b 17, 9. 1034 b 8, 13. H3. 1043 b 17. 5. 1044 b 2. Λ3. 1069 b 35, 1070 a 15. Phys. E1. 224 b 5, 11. Met. K 11. 1067 b 9.

一〇八 一般に全く文字通りの發生とか消滅と言ふことはな

く、或るものの發生は同時に他のものの消滅であり、また その逆である。(cf. Gen. et Corr. A3. Zeller, op. Cit. 391) そして技術的制作はこの質的變化の一種であり、且 その技術の本質をなすところの形相は技術習得に先行する 制作練習に由來する。恰も人から人が生れる如く、家から 家が生れる。即ち家を建てることによつて家を建てる術を 學ぶのである。技術や作者はこの形相の媒介者に他ならぬ (cf. E. N. B1. 1103 a 33, b 11. Met. θ. 1. 1048 a 26–28. Z7. 1032 a 32–b2. 21–23 aa.)

一〇九　De An. Γ8. 432 a 1.「かくして靈魂は丁度手の如きものである。蓋し手は道具の道具であるが、理性は形相の形相であり、感覺は感覺されるものの形相である。」之は道具の道具と形相の形相と言ふ所なる類比の爲にのみ手といふ道具が引合に出されたのではなく、それ以上に理性や感覺の形相把捉が實用的意味を帶びてゐることを意味するものであらう。

一一〇　Met. Z9. 1034 a 24.「家屋は家屋から造られるが、その譬は技術はそのものの形相だからである。」Ibid. 7. 1032 a 32.「しかも技術によつて生ずるものはその形相が靈魂の中にあるところのものである。」Ibid. 1032 b 11.「蓋し醫學及び建築術は健康及び家屋の形相である。」Λ3. 1070 a 15, 30. 4. 1070 b 33. Gen. An. B1. 735 a 2. B4. 740 b 28. Part. An. A. 1. 640 a 31.「技術は感覺の概念にして實體をもたぬものである。」Ibid. 639 b 15. bf. Gen.

An B1. 734 b 21. a 31.

一一一　De An. B4. 416 a 35.「更に食物は營養を攝取するものから何か働きかけられるが、逆にそれが食物から働きかけられるのではない。」Ibid. b3. 12, 13, 23, 20. Γ. 12. 434 b 19.

一一二　Bergson, Matière et memoire 48.

一一三　cf. Ibid. 18 f.